◎ウィンターガーデン初公開

The Original Style of Prince Asaka Residence, in 1933

美しく蘇ったウィンターガーデン

庭園美術館開館20周年の2003(平成15)年は、また旧朝香宮邸竣工の70周年にもあたります。この記念すべき年に、ご来館の皆様から公開のご要望の高かった「ウィンターガーデン」の修復工事を終え、ついにその内部をご覧いただける運びとなりました。皇室専門の設計集団であった宮内省内匠寮(たくみりょう)の設計*1による「ウィンターガーデン」は、朝香宮邸唯一の3階の部屋で、一般公開は初めてのことになります。

装飾に木材を多用した他の室内と異なり、「ウィンターガーデン」には漆喰(しっくい)と石材、そして金属とガラスが用いられています。白漆喰による天井と壁は、今回の修復で亀裂と欠損部分に手を入れ、全体を塗り直してその白さを蘇らせました。市松模様の床から壁にかけての大理石と、劣化の激しかった窓枠やノブ、蛇口、排水蓋などの金属部は、細部まで慎重に研磨した結果、竣工当時の微妙なフォルムを取り戻しています。また失われていた円形の照明器具は、『朝香宮邸新築工事録』(宮内庁書陵部蔵)に納められていた青焼きの図面に基づいて、正確な復元を行いました。

真鍮製の蛇口

部屋に入ってすぐ右側にある箱状のものは、植物を入れるためのものです。「ウィンターガーデン(冬園)」とは、冬でも植物を管理できる庭のことで、この部屋は夏場に涼めるようにと配慮された、2階の「北の間」に対する「温室」として設計されたものでした。天井高のある宮邸は、冬にとても寒かったといわれますが、「ウィンターガーデン」にも、竣工後に改めてヒーターが取り付けられています*2。

設計段階において、「ウィンターガーデン」には内匠寮によって、オリジナル・デザインの籐椅子が準備されていました。しかし実際にはマルセル・ブロイヤーによる最新式の鋼管(スティール・パイプ)製の椅子が置かれました。それらは宮邸竣工前年の1932(昭和7)年、上野松坂屋で開催された「新興独逸建築工芸展覧会」に「パイプ家具一式」*3として出品されており、同展をご覧になった鳩彦(やすひこ)殿下自らが購入されたものでした。市松模様に映(は)える金属の輝きと鮮やかな色彩からは、当時の先鋭的なデザイナーの覇気が伝わってくるかのようです*4。

このたびの公開に至るまでには、およそ二年におよぶ準備期間を要しましたが、この間に数多くの方々から修復の意図をご理解いただき、多額のご寄付を頂戴いたしました。最後になりましたが、ご協力をいただきました皆様方にあらためて厚くお礼を申し上げます。(中原) ◆

オリジナル・デザインの排水蓋

*1.1階の「第一応接室」と「小食堂」、2階の「殿下の書斎」を除いた部屋が内匠寮の設計によるものです。

*2.宮家の方の回想によると、この部屋に卓球台を持ち込んで遊ばれたこともあったそうです。

*3.『新興独逸建築工芸』、松坂屋、1932年

*4.マルト・スタム(1899-1986)とマルセル・ブロイヤー(1902-81)らによるカンティレヴァー(片持式)の椅子は、近代家具の典型と称されています。残念ながら宮家で使われていたものは所在が不明なため、今回はスタムのデザインを含む現行品による展示となります。籐椅子は、竣工後に2階のバルコニーで使用されました。